

近頃、気温の寒暖差が激しいからであろうか。風邪をひいてしまい、会社を休む羽目になってしまった。馬鹿で無いと言う証左であると妙に満足してしまった。情報収集衛星の打ち上げが成功し、これで期待通りの体制となった。次は更に解像度を高めることであろう。

先日、『官僚の失敗—歴史的視点からの検証』斎藤健東京財団特別研究員（前埼玉県副知事）と中西輝政京都大学教授の一時間半に及ぶ対談を聞く機会があった。対談の中から多くに気に入ったフレーズがあったので紹介したい。Nは中西教授，Sは斎藤氏である。[?]は小生のメモに記載ないので不明である。



(2月16日:憲政記念公園にて寒桜3本満開であった)

N : 異端のエリート

大英帝国が衰亡の危機に瀕しながらも不死鳥の如くに蘇ったのは常に異端のエリートが社会的に準備されていたからだ。イートンに対するハロー校、ケンブリッジに対するオックスフォード大学、労働党と保守党等

S : 指導者層の変質

日露戦争までは日本の指導者層は道を誤ることはなかったが、昭和に入って以降何か指導者層が変質して道を誤らしめた。

S : ジェネラリストとスペシャリスト

明治の元勳は、武士であった。武士は戦をするだけではなく、商才も技術に対する造詣も深かった。昭和の軍人は時代の要請があったとは言え、軍事スペシャリストであり、明治の元勳と本質的に異なる。

N : productive looseness (創造的怠惰)

日常のに文化の差異に注目する必要があるのではないか。好い加減さの中に創造的芽がある。それらがいざと言う場合に発揮される。小生が陸幕勤務した時代に紙と鉛筆一本を机の上におき日が一文字も書かない日があっても良い。否それこそが本当の仕事であると指導されたことがあったがそういう余裕があっても良い。

N : 民主主義にはエリートが必須

民主主義が衆愚政治に陥らないためには、エリートが必要である。

S：人の素質を見抜き、育てること

江戸期に寺子屋があったことは日本の明治勃興期に有効ではあったが、藩校の存在を忘れてはならない。そこで時代を担う人材が育てられた。今の時代、人が居なくなったといわれる。

S：平家、海軍、国際派

負け犬の総称、何故彼等は敗れたのか。日本のエリート社会のひ弱さが何時しか狂ってしまって敗者となってしまう。

？：和魂洋才が日本の将来に必要

漢詩の素養もなくなってきている。

S？：1922年が日本の転換点（明治期から昭和期への）

最後の明治の元勳が死亡、日本共産党が組織された、東大法学部のカリキュラムが改正された。これによって日本のエリートの崩壊が始まった。

？：10年に一度の重大決断を行うために、他の8年9年がある。

？：多様な経験と内省力が重要だ。

？：民間企業も最近では時間的余裕（上述の創造的怠惰な余裕）がなくなっている。

（フレーズも内容解説も小生の偏見と独断がかなり混入していることをお断りしなければなるまい。趣旨的なものを御理解頂きたい。）